

山田寺第1次の調査

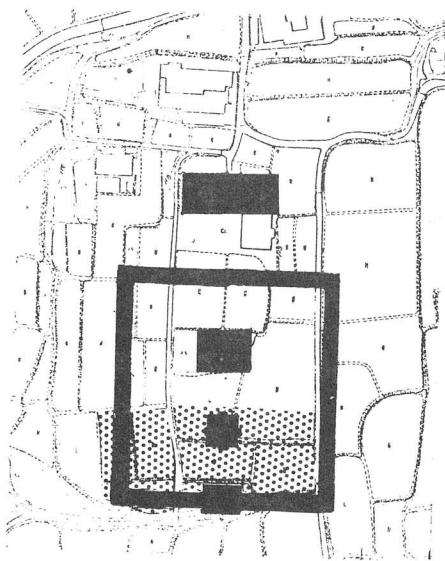
(昭和51年4月～昭和51年12月)

奈良県桜井市山田に所在する山田寺は、塔・金堂・講堂跡の土壇や礎石をよく残し、昭和27年に特別史跡に指定された。昭和50年3月、史跡指定地の国有化が進み、昭和51年度から、史跡整備のため伽藍中心部に数カ年にわたる発掘調査を実施することとなった。初年度は、残存する塔の土壇を中心に、中門・東西回廊推定地を含む約2,700㎡を発掘調査した。その結果、塔の基壇規模、基壇の築成状況、塔に至る参道、中門、西回廊などが明らかになった。塔の中軸線は、国土方眼北に対し北で約1.5°西に傾いている。

なお、山田寺伽藍配置復原図で、金堂と講堂の間に北面回廊を通したのは、金堂と講堂の間隔が塔と金堂の間隔に比べて大きいこと、飛鳥寺や法隆寺のように講堂が北面回廊の後方に建つ例があることなどの理由に基づくが、1つの試案であり、今後の調査によって明らかにしていきたい。

I 遺構の概要

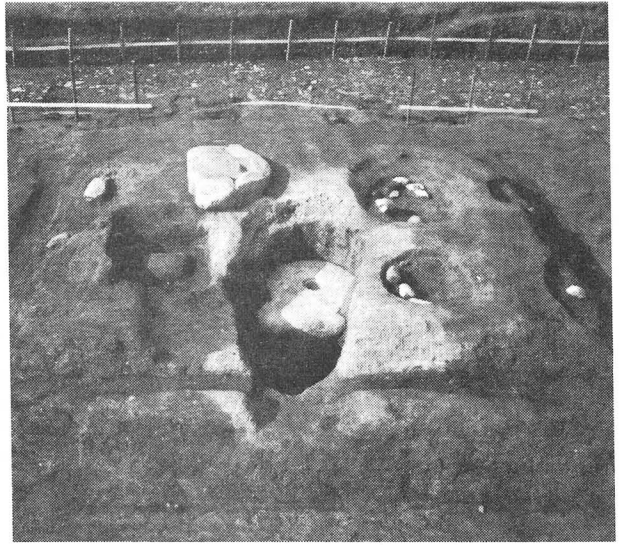
〔塔〕 塔SB005の基壇は一辺約129m(43尺)を測る方形土壇で、四辺の中央部に階段の跡である張り出し部を有する。礎石は心礎と四天柱のうち西北隅のものだけが原位置に残る。礎石の据え付け跡は、四天柱のうち東南・東北の2カ所、東側柱列のうち北第1・第2・第3と北側柱列のうち西第2にあたる位置、計6カ所で確認した。これらの据え付け跡から塔の平面規模が、3間×3間で、柱間は中央間8尺、脇間7尺



山田寺伽藍配置復原図

であることが判明した。

西北隅の四天柱礎石は、長径 1.62m、短径 1.2m、厚さ 0.58m の安山岩製で、上面に径 1m の円柱座を作り出している。東南隅四天柱の据え付け痕跡には、花崗岩礎石の底部破片が残っており、四天柱礎石は安山岩と花崗岩を併用していることがわかる。発掘以前から心礎位置に露

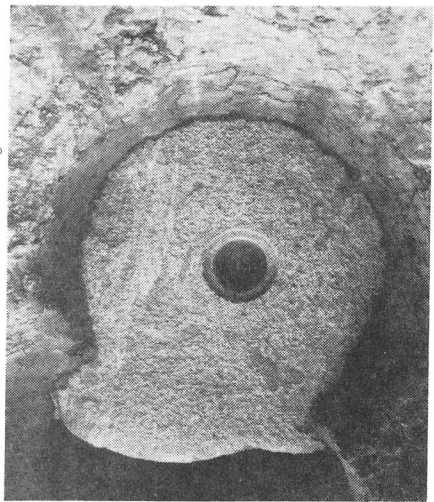


出していた礎石は、従来心礎か 塔心礎と礎石すえつけ穴（南から）

と疑われてきたが、基壇地下から心礎を検出したので動かされたものであることが判明した。この礎石は、長径 1.8m、短径 1.45m、厚さ 0.6m の花崗岩製で、上面に径約 1m の円柱座を作り出している。おそらく明治年間、心礎周辺の既掘坑を埋めた際に四天柱礎石を転がしたものと考えられる。

心礎は基壇上面から 1m 地下にあり、花崗岩製で、大きさは南北径 1.72m、東西復原径約 1.8m、厚さ 0.84m を測る。心礎上面は平滑に加工し、中央部に舍利孔がある。この舍利孔は 2 段に穿たれており、上段の直径は 30cm、深さ 3cm、下段の直径は 23cm、深さ 15cm を測り、底部は碗状を呈する。内面には赤色顔料が附着していた。上段は蓋を受けるためのものとみられる。

心礎下面には径約 1m の円柱座を、鑿痕を残す荒い仕上げで作り出している。この底部の円柱座の解釈としては、四天柱礎石として用意した礎石を、途中で予定変更したものとすれば、四天柱礎石推定の厚さ 0.6～0.75m に比べて厚すぎる点にやや難点があり、他の場所で使用された礎石を山田寺へ搬入し、心礎



塔心礎

として再利用したとすれば、円柱座に仕上げ加工が行われていない点に疑問が残る。

基壇高は旧地表の瓦敷き面から四天柱礎石上面まで約1.8mの高さとなる。基壇の外装は、花崗岩の地覆石の一部と抜き取り穴がよく残っていたが、羽目石・葛石は残っていない。ただし、基壇周辺からは凝灰岩の切石が多数検出され、それらの中には、縁に小さな段をつけて仕上げた石があり、羽目石・葛石は凝灰岩であったと見られる。

地覆石の大部分は抜き取られ、花崗岩の底部の風化剝落した部分が土に附着してその痕跡を留めるのみであったが、塔基壇東側では、長さ0.6m、幅0.5m、高さ0.44mのほぼ全形をうかがえる地覆石が1個残存していた。上面には、羽目石を立てる幅8cmの凹みを作り出している。抜き取られた地覆石を復原すると、幅0.5m、長さ0.6~0.8m、高さ0.4~0.5mのものが最も多い。概して、基壇の隅と階段部分に大型の石を使っている。

階段は幅3m、出が1.5mに復原できる。基壇の周囲には幅1.4mの犬走りがめぐっている。犬走りは縁石に雲母を含む砂岩系の黒い石を並べ、縁石と基壇の間にも同質で縁石よりも小さな石を敷いている。縁石は塔の東半分が最もよく残っており、幅0.3~0.4m、長さ0.3~0.8mの大きさである。犬走りの縁石は、階段の張り出しの出と同一線上に揃っているので、犬走りは基壇化粧当初の仕事と考えられる。なお犬走りは階段前面にも設けられているので、犬走りも階段前面では張り出している。その大きさは、幅4.8~5m、出0.8~1mと、四方やや不揃いである。階段前面の犬走り張り出し部分の石は、10cm程度の小さな縁石と同質の石を使用し、西側では埴、南側では花崗岩に一部変えている。また、この階段部分をめぐる犬走りは、塔基壇の東西・南北中軸線に対して正しく左右対称にならず、塔基壇および階段の出にそろえて基壇を方形にめぐる当初の犬走りに対してやや時期的に遅れ、後に付加されたものと考えられる。

次に基壇の築成状況について述べる。まず整地土および地山を、基壇平面よりやや大きく南北15m、東西16mの方形に、約1m掘り込み地業を行なう。東側は2段の掘り下げを行なう。東側東端で約0.5m掘り下げ、さらに2m西へ行

った所で、約1m掘り下げている。しかし、北・西・南側では1段になっている。つぎに約0.2×0.2m程の角礫を底に置く。その後約16mの厚さに黄褐色粘質土と灰色砂質土の山土を交互につきかためて版築する。この場合、整地土より上の版築は、掘り込み地業より外側に出る部分がある。



調査地全景（北東から）

次いで心礎を入れる穴を掘り、心礎をすべり込ませる。南北断面では、すべり込み穴の南北両壁が急傾斜しているので、すべり込ませた方向は東・西いずれかの方向であろう。その後、心礎周辺を黄褐色粘質土と灰色砂質土の山土でつきかためる。そしてさらに上約1mほど版築をおこなう。この上層の版築では、下層の版築にみられる黄褐色粘質土と灰色砂質土のほか、灰色粘土と花崗岩の粉末が入っている。この版築をおこなう過程で、心礎上面の周辺に根巻きと思われる黄土色の粘土を置いている。この粘土は、心礎上面の既掘坑によって大部分が破壊されているので、全体の形状をうかがうことはできないし、法輪寺塔で検出された添木の痕跡も認めることができなかった。しかし、残存している部分では、版築土の各層とかみ合っており、北側では11層、南側では5層の粘土ブロックを認めることができた。この粘土ブロックが根巻き粘土であるとすれば、心柱を立てる時点は、上半部分の版築を行なう以前となる。

なお、階段の張り出しは、基壇土を削り出して作っているが、最初の版築土を一度部分的に削り取り、新たに黄褐色粘土を置いて突き固めている。この中には、凝灰岩の粉末が混っており、この階段部分黄褐色粘土の突き固めの時点には、すでに塔の羽目石や葛石および階段施設を作るために凝灰岩を持ち込んでいることがわかる。

〔参道・瓦敷き〕 塔の南側で、塔と中門を結ぶ参道SX004を検出した。こ

の参道は瓦敷きからなるもので幅1.5m(5尺)を測る。瓦敷きの両端には人頭大の花崗岩を並べて仕切っている。

塔周辺では、瓦敷きを検出した。瓦敷きの中には、平瓦が最も多く、他に丸瓦・鴟尾・単弁8弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦・極先瓦・熨斗瓦などの瓦類の他に、須恵器の大型の甕の破片など種々の材料を用いており、またそれらの間に混って土師器杯、甕、須恵器杯、蓋、瓶など天平年間から奈良末の土器類を検出した。瓦敷きの範囲は、塔周辺を中心とし、発掘区東北隅にも広がっているが、また全く瓦敷きの存在しない場所もある。この瓦敷きの存在しない範囲について、あるいは建物跡かと疑われたが、そのような痕跡は認めることができなかった。瓦敷きはおそらく地盤舗装に関連したものであろう。

瓦敷きの平瓦は、凸面を磨り消したもの、格子叩き目を有するもの、縄叩き目を有するものなどがあり、凹面に「大」のヘラ描き文字を持ったものがある。縄叩き目を有する瓦は比較的少ないが、南北3.5×東西9mの範囲で縄叩き目の瓦を置き、南北両側に格子叩きの瓦を置いた箇所がある。なお、塔の東側では、瓦敷きの中に直径30cmの円筒土管を1個埋め込んでいた。

〔中門〕 中門SB003の推定位置では中門基壇の一部と掘立柱の柱穴SX013を、桁行4間、梁行1間分検出した。柱穴は、桁行が11～14尺の間で不揃いであること、柱穴の大きさに比べて柱間が広いこと、伽藍中軸線上に中央の柱穴があることなどから、中門建設のための足場穴ではないかと考えられる。

現在、基壇土の大部分と礎石はすべて失われているが、過去において、中門推定地の東で3個、西で2個の礎石が掘り出されたという。前述の柱穴を中門の足場穴として復原すれば、中門は桁行3間、梁行2間に復原でき、柱間は桁行13尺、梁行約14尺前後となる。

以上のように、出土した柱穴を足場穴と解釈したが、こう考えることに全く疑問がないわけではない。まず、礎石および据え付け痕跡がすべて失われて足場穴だけが残るだろうかという疑問があり、つぎに、塔から中門へ向かう参道の南端と、中門の足場穴検出面とは1m程の高底差をもっており、中門地区が塔周辺と違ってほぼ同じレベルであったとすれば、足場穴は1.6mにも達する

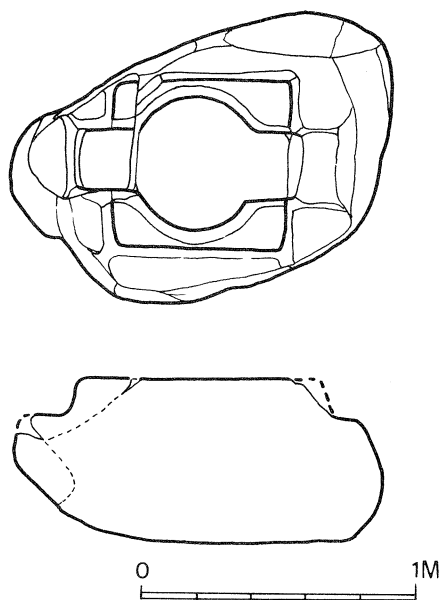
深さとなる。このような足場穴はまず考えられないので、中門地区は当初から一段低い位置にあったと考えられよう。

この場合は、途中に階段施設を設定しなければならないが、該当する部分は、東西方向の近世～現代におよぶ3時期の溝によって破壊されており、確かめる手段がない。しかし礎石の推定位置から中門北側の軒先を14尺程度と考えると、中門の軒先と参道の南端とは1.5～2mの余地があり、階段施設を設けるに十分な広さを有している。また、最も西側で検出した1個の掘立柱の柱穴を、中門西側の軒先に関連する足場穴とすれば、西側の軒の出は15尺前後となる。こうした点や南面回廊とのつながりを含めて、なお検討を要する点が多々あるが、今回の調査の範囲では中門建設のための足場穴とするのが最も妥当であろう。

〔推定回廊跡〕 塔跡の西側を走る道路の西は、塔周辺に比べて一段低くなっており、後世の水田造成と耕作による削平が著しい。この推定西面回廊地区では、塔の中心から約37.5mと41.7mの位置で二カ所ずつ礎石落とし込み穴を検出した。これが西回廊SC070に關係するものとすれば、梁行約4.2m、桁行約3.6mの単廊が復原できる。

この西回廊の位置を伽藍中軸線によって東に折りかえすと、東回廊SC060の位置は現在の里道の東にあたる。これに隣接する調査地区東端では瓦敷き上のバラス面から多数の完形丸・平瓦が折り重なるような状態で出土しており、東面の回廊をこの位置に推定して、ほぼ誤りないものと思われる。

なお、中門から西側の南面回廊へ移行する部分に、近世の水路が検出されたが、その中から1個の花崗岩製礎石が出土した。この礎石は、径0.63mの方座の上に径0.49mの円柱座を造り出すもので、円柱座の両側には、地覆座がある。これを中門の礎石



水路出土の礎石実測図

とすれば、東西側柱中央の位置に比定できるが、ただこの場合は3方に地覆座を持つのが普通である。こうした点を考慮に入れ、ここでは南面回廊の南側柱の礎石と考えた方がよさそうである。

〔土壙・井戸・その他〕 塔の南西方向で検出された土壙 SK006は、南北9m、東西16m、深さ11mを測る。土壙内からは、完形の軒丸瓦2点を含む多量の瓦、轆の羽口、鉄滓、手斧の削り屑、刀子の柄、7世紀後半の土師器・須恵器などが出土した。この土壙は出土遺物の内容および年代から、伽藍造営時の廃棄物等を一括して捨てた穴と考えられる。

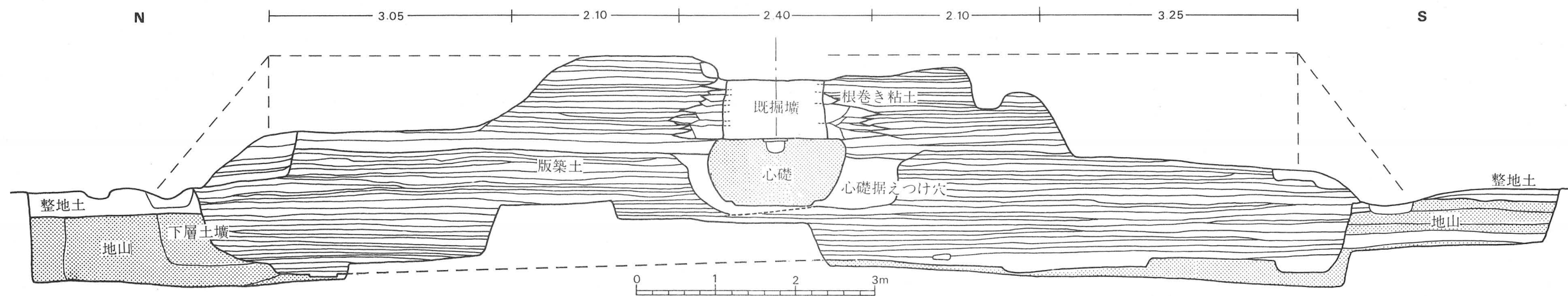
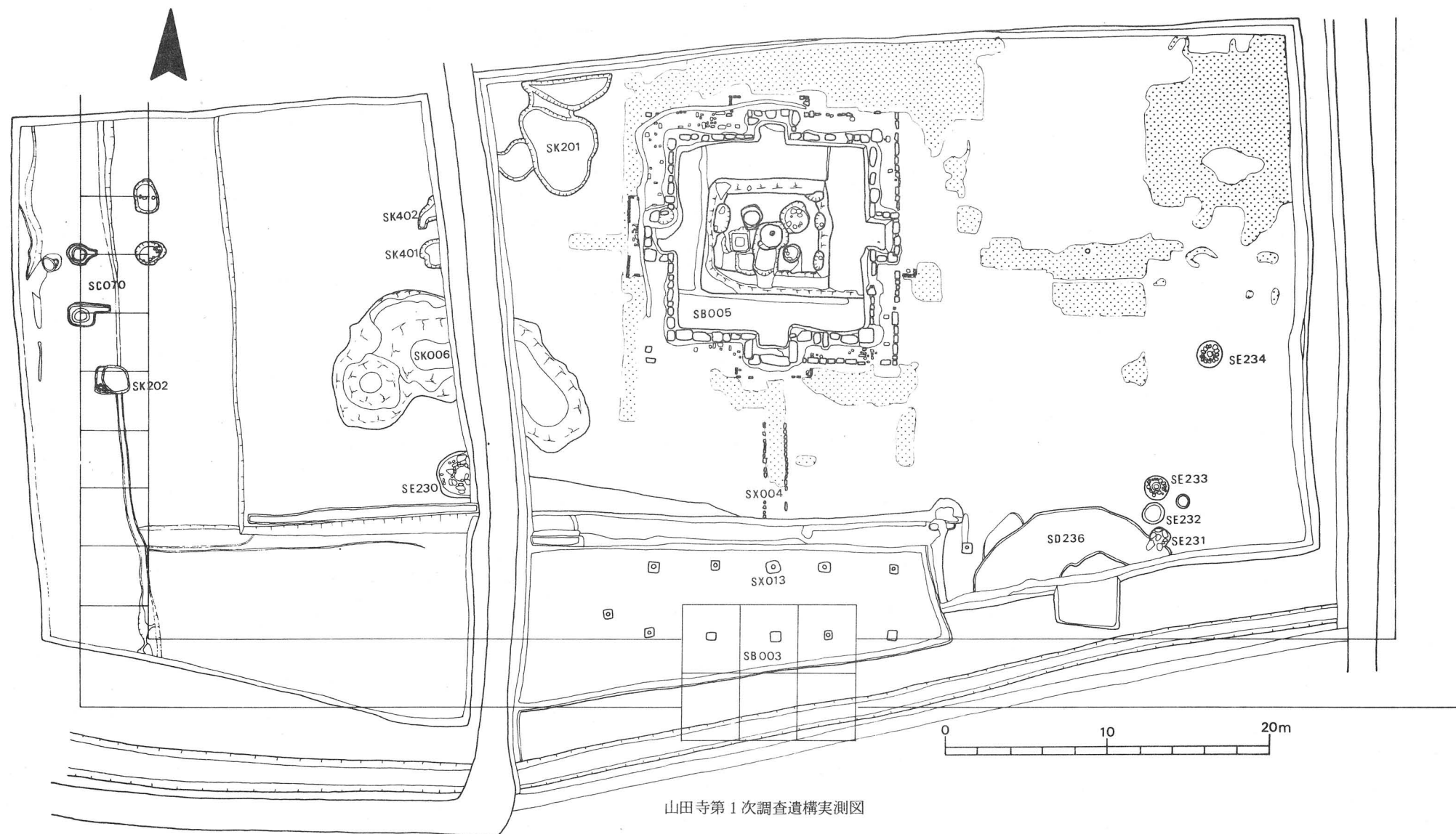
SK401、SK402は、径約2mの不整形の土壙で、深さ1.2m、土壙内から遺物は出土していない。同じ性格の土壙は、塔基壇たち割りの際にも、整地土の下から検出した。これらは山田寺造営前のものであるが、性格は明らかにし難い。

中世の瓦溜りSK201は、東西約6mで、南北長約8m分を検出したが、北は調査区外に広がる。土壙内からは多量の瓦とともに、瓦器片が出土している。

SE230は平面不整円形を呈する石組井戸であるが、東側は道路下にまで延びている。南北径14m、底面の内径1m、深さ約2mに達する。花崗岩の乱石積である。井戸内からは、曲物の底板・陽物形木製品・瓦器碗・小皿・土師器小皿・青白磁合子片・瓦が出土した。裏込めの土には13世紀の瓦器を含む。

SE231・SE234は周囲及び底を石組とする井戸である。SE232は平面が円形で、掘り方は深さ17mに達しているが、内側から、井戸枠などの施設は検出されなかった。

SE233は石組井戸で井戸底に曲物を2重に入れ込む形式である。曲物の底には板石を敷く。外側の曲物は、高さが10cmで、外径47cmと、外径45cmの二つの曲物を合わせ、38カ所に木釘を打ち接合している。内側の曲物は、外径34cm、高さ23cmである。SE233とSE234には、井戸埋土に竹をさし込み、SE231の底からは瓦器が出土している。SD236は幅3～5mの水路の跡であり、蛇行しながら西流している。この水路は中門建設以後で井戸SE231を作る以前に流れはじめたものである。



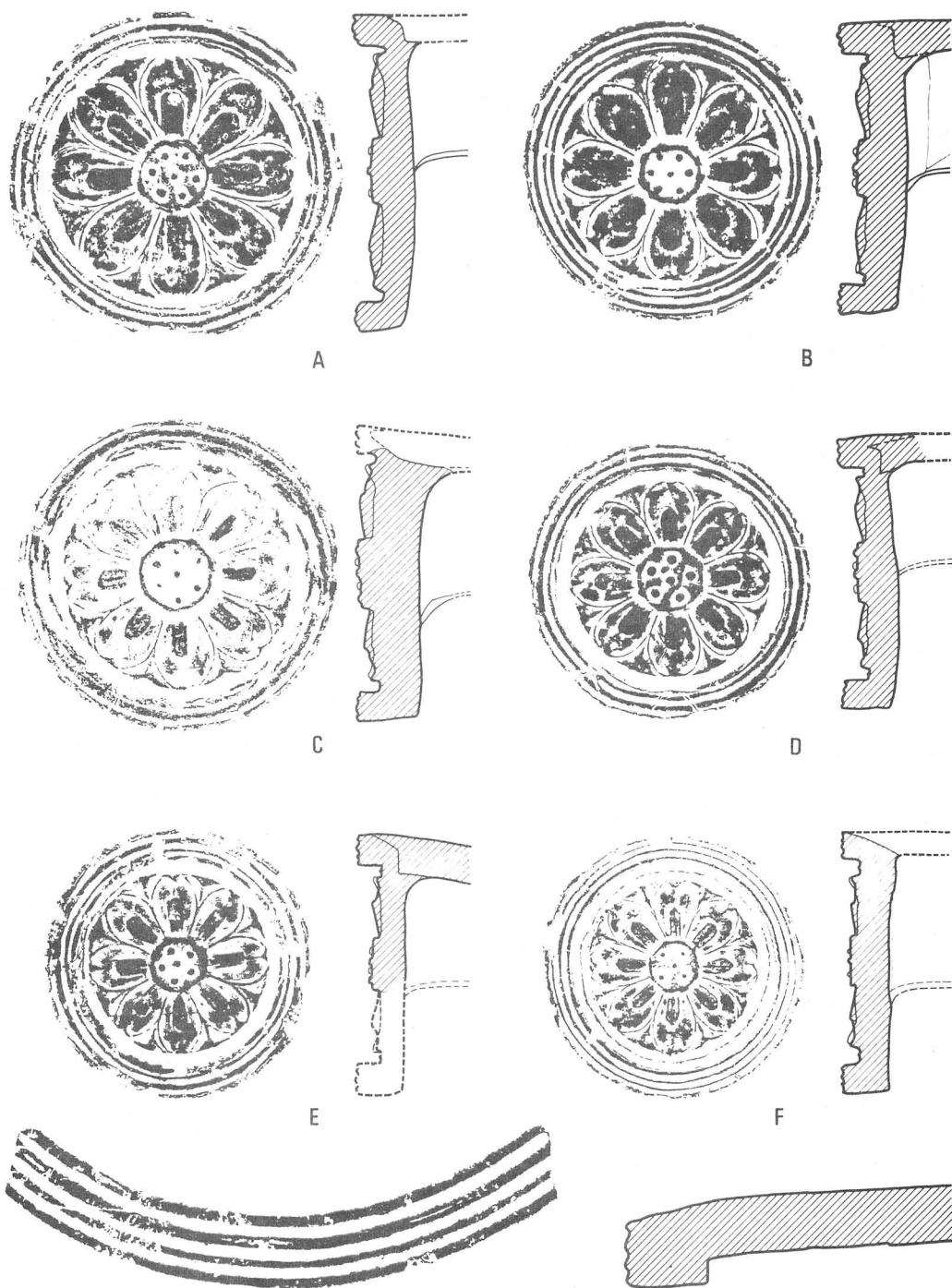
〔土層および塔廃絶の時期〕 塔の東側では、地山の上に直接瓦敷きが載っているが、塔の西側では0.3m前後の整地（褐色粘質土）を行ない、その上に瓦敷きが載る。この瓦敷きの年代は、出土した土器から天平年間～奈良末と判断される。

瓦敷きの上には、バラス・瓦を含む暗灰色粘土のバラス層がある。このバラス層からは、10世紀の土師器が出土している。発掘区東側では、このバラス層の上から垂木や茅負などの建築部材が出土した。この部材は、焼けた痕跡を全くとどめておらず、また、いずれも東回廊に近い位置から出土しているので、東回廊に関連するものと思われる。おそらく、東回廊は、10世紀頃に倒壊したのであろう。

その後、塔の東側では、暗青灰色粘土・青灰色粘土・灰褐色粗砂が堆積した。この上に、瓦・バラス・焼土を含む灰褐色粘質土が堆積している。この焼土層からは瓦器片が出土しているが、量的に少なく、正確な年代を決めることはできない。しかし、焼土が検出されることと瓦および埴仏に焼けた痕跡がみられることから、塔は焼失したとみられ、その年代は瓦器の年代から12～13世紀頃と考えられる。『扶桑略記』にみられる、治安3(1023)年に、藤原道長が山田寺に立ち寄った際、「覧二堂塔一堂中以二奇偉二荘嚴」の記述と対比して考えると、この時点では東回廊は倒壊していたが、金堂及び塔は、まだ残存していたとみることができよう。

II 遺物の概要

瓦埴類・金属製品・木製品・土器類などがある。軒丸瓦は総数 2183 点で、1 点の重圈文軒丸瓦を除き、他はすべていわゆる「山田寺式」の単弁 8 弁蓮華文軒丸瓦である。この「山田寺式」軒丸瓦は、6 種に分けられ、蓮子が 1 + 6 のもの（A・B・C）、蓮子が 1 + 5 のもの（D・E）、蓮子が 1 + 4 のもの（F）に分けることができる。A は、瓦当面径が最大で、弁も長くて幅が広い。B は、中房が小さく、内区と外区の間に 1 重の圈線がめぐる。C は、A・B に比べると、中房が大きく、弁の長さにくらべると幅が広い。瓦当は厚く、重厚な作りである。E は、D にくらべると小形で、中房が小さい。D・E いずれも



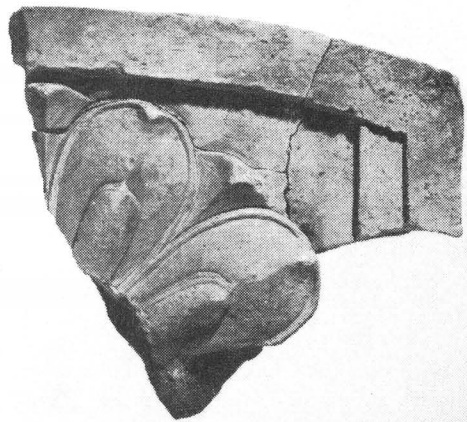
山田寺出土軒瓦（縮尺4分の1）

内区と外区の上に1重の圈線がめぐる。Fは、最も小形の瓦で、小さな蓮子を配している。内区と外区の間は広く、その間に1重の圈線がめぐる。A～Fいずれも外区には4重の圈線をめぐらしている。出土点数は、A：341点（20.7%）、B：476点（28.8%）、C：89点（5.4%）、D：703点（43%）、E：2点（0.1%）、F：32点（2%）で、Dが最も多い。

多くのものは瓦当と丸瓦部が剥離しているが、Bには丸瓦部が接合する例があり、玉縁を有している。瓦当面と丸瓦部の接合状況は、斜めに切り落した丸瓦部端面に格子目の刻みを入れて接合するが、Cの中には瓦当裏面にも刻みを入れるものがある。重圈文軒丸瓦は、6012型式で瓦当裏面に布目がある。

軒平瓦は大部分が重弧文で、四重弧文軒平瓦が9割以上を占め、三重弧文がわずかに認められる。重弧文以外には、奈良末の均整唐草文（中心飾り逆転）が出土している。これら「山田寺式」軒丸瓦と重弧文軒平瓦は、胎土に砂粒を多く含み、焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈するものが多い。

鴟尾は頭部片など、2個体分以上出土している。全体の形は不明であるが、腹部片には単弁蓮華文様を重ねている。鬼瓦には単弁蓮華文2種、奈良時代の鬼面文2種がある。蓮華文はA・B2種に分類できる。Aは大形で弁はシャープである（写真参照）。BはAよりやや小形で（表紙カット参照）、弁の盛りあがりもAに比べて薄い。Bは、ヘラ削りによって弁の反転を強調している。また、Bの蓮子は、十文字の割り付けを行なった後、竹管をさし込み、穴をあけ、その中に粘土棒を入れている。A・Bいずれも両側下端にくり込みがあり、降り棟に使用したと考えられる。鬼面文は、南都七大寺系統の鼻が高く、どんぐり目で、眉の線鋸歯文と周辺の連珠文をもつ鬼瓦Aが1個体と、眉は平坦で



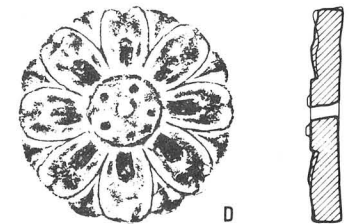
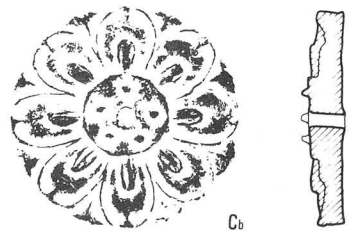
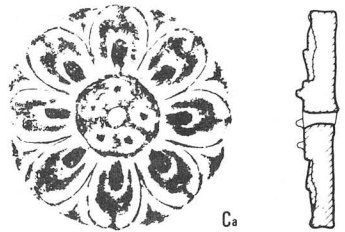
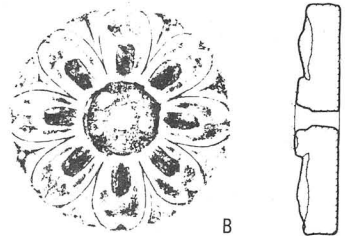
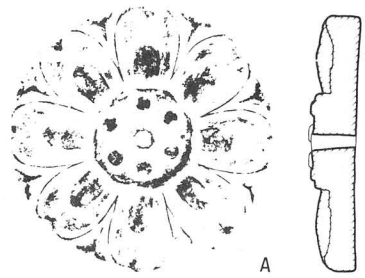
蓮華文鬼瓦A（縮尺4分の1）

鋸歯文はなく、髪が上から下へ流れる鬼瓦 B が 2 個体が出土している。後者は奈良末頃のものであろう。

榼先瓦は、釘孔の周囲に 6 個の蓮子が 1 重にめぐる A と、5 個の蓮子がめぐる B ～ D とがある。A は最も大形で、弁、子葉、間弁ともに肉太である。B は弁のそり返りが大きく、子葉も太目で、弁中央にシャープな稜が走る。C は A ・ D に比べて中房が大きく、弁が短い。また蓮子が突出している。C は子葉中央に稜線の入らないもの Ca と稜線が走るもの Cb とがある。Cb は彫り直しであろう。D は、B に類似しているが、B より弁の反転が少なく、子葉も小さい。出土点数は Cb が最も多い。A および B の中には、中房から間弁へ移行する部分に、2 弁間隔をおいて 4 カ所、焼成前の削りを行なうものがある。A には側面に割り型によって製作されたと考えられる甲張りを残す例がある。



鬼面文鬼瓦 B (縮尺 6 分の 1)



榼先瓦 (縮尺 5 分の 1)

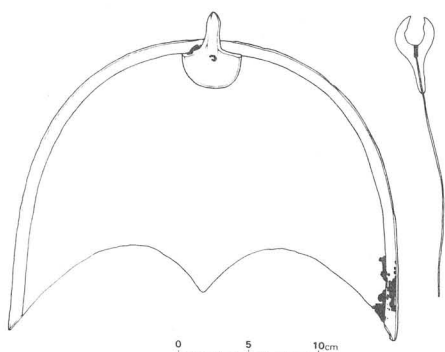
埴仏は 6 種類出土している。独尊像埴仏は一辺約 3 cm の方形で、最も小形である。見事な後

屏を有している。四尊連座埴仏は、仏像の光背・頭部の輪廓によって、3 種類に区別できる。十二尊連座埴仏は、最も数が多く、一体

の如来座像を横に4列3段に配している。釘孔は、中央の二尊の四隅に穿たれているものが多く、焼成前に穿孔している。釘は方形である。この十二尊連座
 塼仏の大きさは、縦約20cm、横約15cmになる。これは、『護国寺本諸寺縁起集』
 にある、「五重塔付銅板小仏、高五六寸、広四寸、右居不思議也」の記述の寸
 法とはほぼ一致する。塔及び塔に隣接する地区に塼仏が出土している状況と、塼
 仏に金箔が押されあたかも銅製の如き感をいだかせるので、塔の壁に塼仏がは



塼仏



風招（黒ぬりは鍍金の残存部分）

められた可能性がある。しかし、埴仏の出土は、量的に多くなく、なお検討を要する。この他に、大形の独尊坐像埴仏の脚部の断片が3片出土している。

瓦類は、この他、面戸瓦・熨斗瓦・方形の玉縁をもつ角瓦とでも呼ぶべきもの、用途不明の瓦、文字瓦が出土している。文字瓦は平瓦凹面に、大のへら描きを有するものが多い。

金属製品では風招・金銅製飾金具・鉄製茅負隅留金具・鉄釘などが出土している。風招は、金銅製のうすい板で、奈良時代一般にみる両側の先端部が上にはねあがる型式とは異なり、両側先端が下にたれている。これは長谷寺の「銅板法華説相図」の多宝塔初重にみられる風招に最も類似し、実物では摂津伊丹廃寺例にやや似る。天武朝頃の遺物として、奈良時代の風招に先行する型式と考えられる。

木製品は、塔東のバラス層に載る青灰色粘質土から出土した建築部材、井戸から出土した曲物底板と陽物形木製品、SK006から出土した手斧の削り屑と工具の柄がある。建築部材には垂木、瓦座をもつ茅負がある。垂木は断面円形で、直径11cmを測る。ただし両端に釘孔があり、垂木を転用材にした可能性がある。

茅負は約9cmの間隔を置いて、幅27cmの瓦繰りがある。これらの建築部材には、焼けた痕跡は認められない。

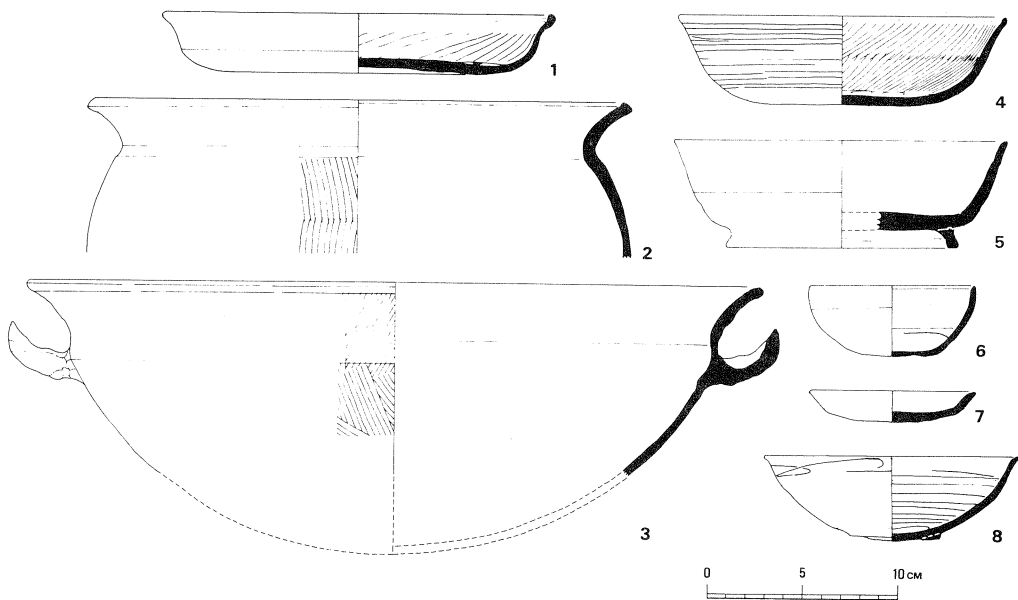
土器は、SK006・瓦敷き面・バラス層・焼土層・井戸から出土したものについて述べる。SK006からは土師器杯AI・B・C・鍋B・須恵器杯AN・B・瓶・



瓦座を有する茅負（縮尺11分の1）

甕などが出土した。この土壇出土の土器には6世紀初頭の須恵器杯・蓋を2例含むが、他は7世紀の土器で、藤原宮の段階よりやや古式の様相を呈しており、670～690年の間に位置づけられる。瓦敷き面からは土師器杯A・甕A・須恵器杯・蓋A・瓶・甕などが出土した。蓋Aは、SK006と同一時期であるが、他は平城宮のSK820出土土器やSK870に類似した特徴をもち、750～780年頃に位置づけられる。バラス層は、塔西側では攪乱状態であったが、塔東側では土師器杯Cが出土した。10世紀代に位置づけられる。焼土層からは、瓦器・土師器が出土したが、いずれも破片で、正確な年代を決めることはできない。井戸出土の土器は、瓦器碗・土師器杯である。瓦器は2例をのぞけば、白石太一郎氏編年の第Ⅲ段階初頭の第7型式、ほぼ13世紀前半に相当する。

今回の調査によって、塔の規模・中門および回廊の位置を明らかにし、ほぼ当初の目的を達成することができた。また塔を含む伽藍造営の際の廃棄物を捨てた土壇から、造営の年代の一端を明らかにし、塔焼失の年代についても、大体の輪廓をつかむことができた。なお心礎については、模型を複製し、南面回廊に関連があると推定した礎石とともに、飛鳥資料館に展示してある。



山田寺出土土器実測図（縮尺4分の1） 1. 2. 瓦敷き 3. 4. 5. SK 006
6. SE 231 7. 8. SE 230